日刊 建設工業新聞

技術を、人と
地球のために。
東熱
東洋熱工業株式会社 http://www.tonets.co.jp

建築へ Vers Une Architecture

建築家・小堀哲夫氏に聞く

「ROGIC」で10件超の建築賞

情熱を持って挑戦し、魂を入れる

建築家の小堀哲夫氏（小堀哲夫建築設計事務所）が設計した「ROGIC」が16年JIA建築大賞、17年日本建築学会賞を受賞した。その他の受賞も10件を超える。近来、これほど建築賞を総なめにした建築はない。以前は組織事務所にいてほとんど無名だっただけに、業界に衝撃を与えた。先見の明のあるクライアント、優れた指導者、上司に恵まれたことで大きく飛躍した小堀氏は「建築に真摯（しんし）に取り組むこと、建築に魂を入れることの大切さを学んだ」という。

研究者主体の豊かな空間

ROGICは、自動車用ろ過機器（フィルター）の開発・製造を主事業とするROKIの研究開発オフィス。同社製品の和紙のようなフィルターが4層構造の室内の天井となり、3次元曲面のボールト屋根が覆っている。階層がいくつもに分節され、そこに光が降り、研究者が伸び伸びと動いている。天竜川に面し、そこから引き入れた池などのランドスケープも素晴らしい。すぐ脇にはROKI本社ビル（2006）がある。小堀氏が久米設計在籍時に携わった作品で、日本建築学会作品選奨やBCS賞を受賞。ここでのクライアントからの高い評価が「ROGIC」へとつながった。

陣内ゼミで学ぶ

小堀氏は1971年生まれ。77年法政大大学院修了後、久米設計に入社。36歳で独立して9年になる。小堀氏を建築家へ向かわせたのは、イタリア都市研究で知られる陣内秀信氏。学部4年から大学院2年まで陣内ゼミに在籍した。

小堀氏は陣内ゼミを選んだ理由を「いろいろな国の調査研究をやっていて、エネルギッシュで一番楽しそうだった。それに比べ意匠系のゼミはどう建築と向き合っているのか分からなかった」と話す。

96年、ゼミの仲間と訪れたイタリア南部のレッチェやバーリは思い出の場所だ。「ほとんどアポなしで、どこの家も入れてくれた記憶がある。自分のすみかや建築に誇りを持っている文化なんだと知りました。実測して平面に起こし、ホテルに戻って議論する。一瞬にスケッチして寸法を取る。そのことを通して、なぜこの空間構成がいいのかを学びました」と懐かしむ。

将来の進むべき方向を探すため、多くのアトリエ事務所やゼネコンで建築の設計を学んだ。学生コンペも取り、卒業設計は大学の優秀作品の一つとなった。

久米設計へ

当時は就職氷河期だったが、アトリエ事務所を選ばず久米設計に入社した。

小堀氏は「設計や造形への自信がありましたから、先輩たちと議論をして生意気だったと思う。多くの建築家が素晴らしい建築を設計していて、模型も大量でとても活気のある時代でした。久米設計で学んだことは大きく、独立後、どんな規模、種類の建築にもひるむことなく挑戦することができました」と振り返る。

「ROGIC」の外観（©新良太）㊤と内部（©新井隆弘）

久米設計で大きな影響を受けたのは野口秀世氏。野口氏は「北上市交流センターさくらホール」で2006年日本建築学会賞を受賞し、久米設計を代表する建築家だったが、15年に61歳で死去した。野口氏について「人間活動に焦点を置いた建築空間は素晴らしく、建築に対する姿勢が違った。自分の仕事を新人の私に説明してくれた。建築に情熱を持って挑戦し、魂を入れることを学びました」と今でも感謝している。

高い見識のクライアント

久米設計時代にも多くの建築賞を受賞した小堀氏は次期エースだった。その中で手掛けたROKI本社ビルは、室内の中央に吹き抜けをつくってそこをオフィスにし、光を入れた空間構成。外部の天竜川の風景はROGICより身近だ。

ROGICは、ROKIの島田貴也社長と土地探しから始めた。小堀氏は「島田社長の何より素晴らしいところは、可能性や創造性に対してブレーキをかけないところ。世界的レベルでの研究をしていることもあって、創造性を止めるたがを外し、無限大で創造しようというポリシーがある。そうしたことを目指す結果はある意味、人間の感性に触れることが大きいと思う。それが発揮できる職場をつくってほしいといわれた時、人間が人間らしく、自分の創造力を発揮できる場所は何か。それが設計する最大のテーマでした」とデザインコンセプトの一端を明かす。

職人の父

小堀氏の父親は棟梁で、小さい頃から現場や神社仏閣によく連れていってもらったという。「（父は）休みなく毎日孤独に働いていましたが、その仕事が面白いからでしょう。その意味では建築家も苦労が多いが同じです。何かが生まれてくる現場の瞬間のワクワク感がある」と父親の仕事と重ね合わせ、今はものづくりの楽しさを感じている。

「ROGICは魂を込めてやり切った気持ちがある」という小堀氏だが、「次の建築はそれ以上に挑戦してやり切ることが自分の中のモチベーションとなっています。良い仕事をして、感謝される建築をつくる職人としての父を超えたい」と夢を語る。

まもなく福井に研究所を主体とした作品が完成する。高い評価を得た「ROGIC」からつながる仕事だ。